

1 日目トーク① 太田耕耘キ氏

(聞き手：加藤りょう)

加藤：『色道四十八手 たからぶね』の上映の前に、若者向けの企画ですので、まず成人映画の概要や本作品について、製作の太田耕耘キ(おおたこううんき)さんにお話を伺いたと思います。太田さん、ご登壇お願いいたします。

太田：太田です。よろしくお願いいたします。

加藤：ご紹介させていただきます。太田耕耘キさんはもともと本町館のスタッフで、関西を中心にピンク映画の広報誌である『ぴんくりんく』を自主的に発行されているほか、『色道四十八手 たからぶね』の製作をやられた方でもあります。本日は成人映画についていろいろお聞きしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

太田：まず本題に入る前に、今日1月17日なんですけれども、阪神淡路大震災があったということで、ちょっとだけ思い出してもらえたらなと思っております。たまたまなんですけれども、ピンク映画出身で一般映画を作っているいまおかしんじ(註1)監督が神戸映画資料館というところで無料の上映会を今日明日やったりしています。多分今日のお客さんのほとんどは当時の記憶がない人だと思うんですけれども。

加藤：まずお伺いしたいのが成人映画の種類についてです。今回の上映会では日活ロマンポルノとピンク映画を上映しますが、これらの違いは何か、ご説明いただけますと幸いです。

太田：はい、皆さん初めて来られる方も多く興味津々だとは思いますが、これから話すことはほとんど役に立たないというか全く役に立たないことなので、気楽に聞いていただけたらと思います。

ピンク映画というのもその呼び名は後付けというか雰囲気をついたもので、〔元々は〕成人映画、今で言うところのR18、18禁の映画のことですね。最初は映画全般で特に規定もなかったんですけど、映倫(註2)の規定でですね、18歳未満の入場を制限する成人映画指定というのが、だいたい1950年、60年頃から出てきたんです。その時代は、とにかく映画時代ですね。ひとつのジャンルとしてポルノ映画ともいいますが、当時はスケベ映画と呼ばれたり、成人映画もちろんそうなんですけど、ポ

ルノ映画とかエロ映画とかですね、いろんな呼び名があったんです。1962年に大蔵映画（註3）というところで小林悟（註4）という監督が、『肉体の市場』（註5）というのを作って公開したんですね。その後、『情欲の洞窟』（1963年、関孝二監督）を当時のスポーツ新聞みたいな記者[夕刊紙『内外タイムス』の村井実]が、ピンク映画と称して作品の記事を書いたことから、18禁のエロい映画をピンク映画と呼ぶのが定着していった。このピンク映画[『肉体の市場』]は独立プロ（註6）の制作で大蔵映画の配給ですけど、作っているのは本当にいろんな人たち、小さな会社から大きな会社まで。

要は裸が見れますよというような成人映画やポルノ映画は、だいたい50年代末、62年から正式に始まる。正式でもないんですけどね。当時もちろんビデオのない時代ですから、白黒なんですけれども、その後パートカラーという時代がありました。今とは逆でカラーフィルムが高かったの。裸になったら急に色がついて、ピンク色の肌色が見えるという時代があったんです。唯一その時動く裸っていうのはピンク映画しかなかったんですね。

そして、日本にカラーテレビが普及して、普通の映画がどんどん人気なくなってきたんです。でも裸が見られるのはピンク映画だけだったので、60年代爆発的にピンク映画が流行った。アクション映画とかそういう普通の映画がどんどんテレビに移っていったお客さんが映画館に来なくなっても、ピンク映画だけは人が入っている。大手の日活も社運を賭けてポルノ映画を作り始めるんですね。これが1971年の『団地妻 昼下りの情事』（註7）で、時代劇と二本立てで公開されました。この映画がものすごくヒットして、そこからは日活以外でもたくさんポルノ映画が作られます。日活はレーベルとして日活ロマンポルノというシリーズ。東映もポルノ映画はナウポルノ（註8）とかですね。松竹も東活（註9）っていう別会社を作ったりとかしてですね。大手も〔ポルノ映画を〕名前をつけて作り出す。

日活ロマンポルノもピンク映画もお客さんからしたら違いはわからないんですけど、今日なんか見比べてもらったらいいかと思うんです。何が違うかって、いちばんは予算が違うっていうことですかね。話がちょっと長くなりましたけど、そんな感じです。

加藤：ありがとうございます。もともと独立プロが作っていたピンク映画というジャンルがあって、映画界が斜陽化していくなかで、大手の5社のうちの1つである日活がそこに飛びついて、そのレーベルの名前が日活ロマンポルノということですね。

太田：日活のなかにも当時、自分たちはピンク映画とはちょっと違うんだみたいな気概があって、ロマンポルノっていうね。これはいいタイトルだと思いますけれども。単にポルノ映画ではなくてですね、ロマンがあるんだっていう。

加藤：ありがとうございます。今、ピンク映画と日活ロマンポルノの違いをお話していただきましたが、もともと性的なシーンを含む映画は検閲の対象となっていたと思うんです。そういった映画が映画館で普通に上映されているというのはどういう経緯だったんでしょうか。

太田：私も細かくは分からないんですけど、ポルノ映画といっても最初は、私のもう1個の研究分野でもある、ストリップ劇場なんかがやっぱり先なんですよ。ちょっと資料を出して見ますけど、1950年より前ですね、47年ですね。お詳しい方が最前列に座っているからものすごくプレッシャーなんですけれども〔一同笑う〕。間違っていたらちょいちょい言ってくださいね、違うよって。

47年からストリップが始まって、最初はちらっと見せるような額縁ショーなんて言われていたんですけど、そのストリップのシーンを映したやつを、映画館でも流し始めたのが大体57年くらいなんですよ。だから絡みとかセックスシーンとかいうよりも、まずやっぱり裸ですよ。動く裸っていうものに対して、みんなが飢えてた。

あとからの質問にも出てくるかもしれませんが、いわゆる海賊版といいますか、海外からのポルノ映画を輸入したり、勝手に自分らで8ミリとか16ミリで撮ったりしたブルーフィルム（註10）って言われるようなエロい映画があったんです。劇場に出す前提で作られている映画とは全く別物ですが、そういうのが各地でちょっとずつ見られていきました。劇場でも、単に裸で踊っているだけのものからストーリー性のあるものが50年代後半から徐々に出てきて、62年に大蔵映画が『肉体の市場』を出して、今に至るって感じですかね。

加藤：ありがとうございます。本町館はもともと5社の一般の映画を上映していたのですが、それは80年代頃からですか？

太田：これがですね、まさしく71年のロマンポルノから本町館もその路線に切り替わりました。今はもうシネコンばかりで説明が難しいんですけど、昔は封切館と2番館、3

番館などたくさん映画館があって、ここは最初から2番館という感じだった。封切館は1本だけで、当然入れ替えもないんですけれど、早く新作を見たいということでお客さんが来る。でも封切館はやっぱり高いんですよ。だからガチっと東宝の配給の映画館とか東映の配給の映画館とか、チェーン展開をしてたんですよ（註11）。でもそういうところだけじゃなくて、地方や、東京とか京都でもちょっと離れたところにある2番館では公開から半年くらい経っている新作を2本立て3本立てでやってたわけなんですね。

〔本町館も〕それでやっていたところ、やっぱりテレビに押されていった60年代の経緯があって、71年にロマンポルノが始まって、当時の本町館の社長がこれだということで、こちらロマンポルノからピンク映画をかけた。もちろんね、〔ここを成人映画の〕専門館という方もいますけど、全然そんなことはなく、劇場の興行としての興行館、映画館としての区分けや線引きって一切なくてですね、別にどこの映画館でも……、話が長くなりすぎたようなんですけれども〔場内、笑いに包まれる〕、〔メインでかけるのが〕ロマンポルノになって、それだけでは足りないんで、ピンク映画も混ぜて3本立てという感じですね。

加藤：ありがとうございます。そういった経緯もあって、今日はロマンポルノとピンク映画を組み合わせて上映するということになりました。

次に、本町館を含む成人映画館独特のプログラムの形式や上映文化についてお話を伺えますか。今回の上映は休憩なしですね。

太田：このような本当に見づらいパターンはよっぽど珍しくなったかなと思います。普通のシネコンの映画というのは1本立て、入れ替え制で、この10年ぐらいはそれが当たり前になってるんですけれども、その2番館3番館というのは、今でも全国にまだ約20館程度は残っているプログラムなんですね。入れ替えなしで朝から晩までいても構わないし、見たいところだけ10分見て帰る人もいるという時代がずっと長くて、その名残が今唯一、ピンクの上映館に残っている。これを20年ぐらい前から最後のプログラム・ピクチャーという言い方をしてます。

昔は東映まんが祭りとか、東映のアニメーションの大会とか、東宝チャンピオン祭りって怪獣映画の特集ですね、ゴジラ3本立てとか、プログラムとしてテレビ番組のようにやってたのが普通だったんです。ピンク映画も同じように、大体1時間とか1時間半とかが多いので、2本立て3本立て、休憩なしでやると。ピンク映画が休憩な

しになっていったのは、今回それを皆さんにも体験してもらおうということで敢えてやるんですけど、結果的にというか、ポルノ映画ですから、こんなに横に並んで座ることがまずないわけですね。自分らなんかもできたら隣の人とおっさんと空けていたいという感じで、それはゴソゴソする奴が来るわけだからですね。いまどきセクハラで訴えられるかもしれないけど、マスターベーションするには途中で明かりがついたら顔がバレて恥ずかしいわけですね。そういうことで休憩を入れずに、朝から晩まで真っ暗な場内で続けて上映して、トイレに行きたい時には勝手に行ってくださいよ、というようなスタイルで。

この10年20年前から徐々に変わってきて、ピンク映画館でも1本ごと、もしくはここなんかは2本ごとにですね、2時間やったら客電〔客席の天井灯など場内の電灯〕を点けて5分休憩とかやってた。そしたら、やっぱり顔に光が差して恥ずかしいっていうね。おっさんでもそういう羞恥心があったから、休憩なしぶっ続けというこのシステムが出来上がったんじゃないかなと思います。それを今日、疑似体験してもらうということです。みんな絡みを目的にしていますから、絡みのシーンが終わったら一斉にこそこそみんなおしっこ行くっていうのが、ピンク映画館でよくある光景です。

これは別にカッコつけるわけじゃないですけど、自分が見始めた20歳ぐらいの時から、逆にこう、面白いピンク映画を見たいって思っている。でもね、3時間おしっこを我慢できないわけですよ、こんな寒いところで。だから自分とか作家主義的にピンク映画を見たい人は、絡みが始まったらストーリーと関係なくなりますから、その時に急いでトイレに行って戻ってくるっていう、正しくはないピンク映画の見方をしていました。疑似体験なので、遠慮なくトイレに行ったり、場内喫煙場が一箇所ありますんで、タバコ休憩とか、してくださいね。

加藤：次にこの後上映される『色道四十八手 たからぶね』についてお伺いしたいと思います。本作品はピンク映画の50周年を記念し製作されて、太田さんも製作を担当されました。本作はピンク映画の黎明期から業界を支えた渡辺護監督（註12）が原案です。残念ながら渡辺さんは亡くなってしまい、監督することができず、代わりに井川耕一郎監督（註13）にメガホンが渡りました。この『色道四十八手 たからぶね』はピンク映画50周年を記念して作られたということで、どういったところにピンク映画らしさが現れているのでしょうか。

太田：ピンク映画50周年記念というのは、勝手に自分たちが名乗って、ちょうどそのタイミングをめぐって作ったんですけれども、これをよろしく思っていない映画会社の人も多分いるかと思うんです。〔成人映画には〕例えば、痴漢電車みたいな痴漢ものとか、人気がある不倫もの、人妻もの、今じゃ絶対企画が通らないレイプもの、スチュワーデスものとかですね、明るい感じで言うと、大学生ものとか、いろんなジャンルがあったわけなんです。『たからぶね』に関しては、ひとつは不倫ものというテーマで、プラスちょっと喪服っぽい感じも出すと。実はピンク映画の人気テーマに喪服ものというか義母ものがあるので、それも絡ませました。「色道四十八手」は、性の四十八手といって、いちばん有名なのが松葉崩しで、聞いたことないかもしれませんが、いろんな体位が48種類あると。そのうちの1つが「宝船」という性の技です。今から見てもらったら、これが「宝船」かと、そんなことできるのかと思うかもしれません。春画を挿し込んだりしているのは、これは明らかにいやらしく、海外のお客さんが和物浮世絵が好きなんじゃないかっていうような、海外の映画祭を意識していて。監督が高齢であんまりうろうろもできないので、極力コンパクトにということで、だいたいピンク映画が1時間で女優3人出すっていうのが定番になっているので、最小人数の女優3人と、男優2人とか、メインは2人なんですけど、男優の3人、本当に3対3、男女6人という、これでピンク映画は最低限出来上がるっていうようなスタイルで作っています。60分よりはちょっと長いんですけど、昔はもうちょっと長かったというのもあって、70分にしました。

加藤：今回の観客の皆さんの中には留学生の方も多いですが、海外のお客様からどんな反応が得られましたか？ 海外で上映されましたか？

太田：これはニッポン・コネクション（註14）というドイツのフランクフルトの映画祭で賞をいただきまして、審査委員特別賞だったかな、結構評価が高くてですね。これまたヨーロッパとアジアで全然反応が違うんですけれども、ヨーロッパの人から見たら、むしろピンク映画って分けないんですよ。だから、そのストーリーの中に当然ある絡みがどうこうとか、どぎついかいということではなくて、反応としてはやっぱり、まず四十八手という体位が珍しいわけですよ。そのちょっと説明なんかもあるんですけど、驚き半分、日本人スケベねっていう感じだったと思います。明るい話ではあるんですけれども、人が死ぬ話でもあります。面白いんだか、悲しいんだか、悲劇なんだか何なんだか分からないような作りになったと思うんです。今日はちょっとあれかもしれないけど、面白かったら笑っていただいたりした方がいいと思います。結構クスクスは笑えるところはあると思うんですけれども、そういう意味では海外の方が割とダイレクトに笑い声とかが出てましたね。

加藤：そうですね、私も事前に観たとき、結構謎な設定が多くて笑えました。最後に『たからぶね』や今回の上映会について何かひとことあればお伺いしたいです。

太田：『たからぶね』もそうなんですけれども、これだけはちょっと忘れずにということ……。私は『ぴんくりんく』というフリーペーパーを、性懲りもなく25、6年作っているんです。フリーペーパーということで、関西のミニシアターとかですね、ピンク映画館に置いてますので、今日も置いてますので持って帰ってもらったらなと思っております。どっかで見かけたらちょっと手に取って読んでもらえたらと。

何年か前にピンク映画の著作権の問題の裁判があったんですけど、今日これも置いてますので、ぜひお1人1冊持って帰って行って、目通していただけたらなと思うんです。荒木太郎監督（註15）のピンク映画が大蔵映画という会社に廃棄されてしまったという事件があって裁判になるんですけど、これを読めばですね、硬いかもしれませんが、裁判の経過とか、大体ピンク映画というのがどういう風に作られていて、どういう風にタイトルが決まっているとか、そういうことも分かるようになってます。無料でお配りしてますので、ぜひ読んでください。

加藤：それでは、そろそろお時間となったので、トークの方は終了させていただきたいと思います。この後15分の休憩をとりまして、その後『たからぶね』を上映させていただきたいと思います。それでは太田さん、ありがとうございました。

太田：ありがとうございました。以上になります。

註

- 1) いまおかしんじ(1965-)：ピンク映画を中心に活躍する映画監督。1990年代以降にデビューした、ピンク映画のニューウェーブとも言われる7人の監督を指す、ピンク七福神の一人。代表作の『援助交際物語 したがるオンナたち』（2005）はPG主催の2005年度ピンク大賞において、ピンク映画ベスト10第1位となり、作品賞、監督賞等を受賞した。現在は、『苦役列車』（2012）の脚本や、『れいこいるか』（2019）の監督など、一般映画にも活躍の場を広げている。

- 2) 映倫：正式名称は映画倫理機構で、映画界が1956年に自主的に設立した第三者機関。その始まりは、1949年に発足した「映画倫理規程管理委員会」（旧映倫）にある。旧映倫は業界内からのみ委員が選ばれており、『太陽の季節』（1956年、古川卓巳）をはじめとする、いわゆる一連の「太陽族映画」に対する審査のあり方が物議を醸したこともあり、業界外の第三者によって運営される現映倫が誕生した。映倫による審査は、青少年にとって適切かどうかを基準に、G（一般映画）、PG12（小学生には助言、指導が必要）、R15+（15歳以上が観ることができる）、R18+（18歳以上が観ることができる）に区分されている。一般財団法人映画倫理機構（映倫）公式サイト、<https://www.eirin.jp/index.php>（2026年5月26日最終閲覧）。
- 3) 大蔵映画：製作・配給・興行を担う映画会社。弁士・映画館主・映画会社経営者であった大蔵貢が、1954年に「富士映画株式会社」として映画を製作したのが始まり。一般映画では、大蔵貢が製作を総指揮した『明治天皇と日露大戦争』（1957）が2000万人の観客を動員したことが記録的であるが、1962年にピンク映画の第一号である『肉体の市場』を大ヒットさせると、以降は成人映画の製作・配給に特化する。興行部門では、大蔵映画の封切館である「上野オークラ劇場」をはじめとする四つの直営館と、名画座「目黒シネマ」の運営も行っている。「大蔵映画とは」、大蔵映画会社公式ホームページ、<http://okura-movie.co.jp/contents/history.html>（2026年5月14日最終閲覧）。
- 4) 小林悟（1930-2001）：1962年に最初のピンク映画と言われる『肉体の市場』を監督した、ピンク映画界の巨匠。様々な分野やジャンル、製作会社を渡り歩き、豊かで多彩なキャリアを築いた。小林はいくつかのピンク映画製作・配給会社と協力し、2001年に亡くなるまでおよそ500本もの劇場映画を監督した。
- 5) 『肉体の市場』（1962）：日本のピンク映画第一号。小林悟監督作品。本作は、映倫によって成人映画として審査を通過していたが、わいせつ容疑で公開当時警視庁からの摘発を受ける。問題となったのは、女がトイレで口にトイレットペーパーを詰め込まれ、強姦される場面、「不死身」をキーワードに会話しながらのベッドシーン、女が体をくすぐられ、笑う度に服を脱がされる場面の三つ。ただし起訴にはいわず、問題の場面を数カット削除して、上映は続行された。肉体映画と呼ばれていたこれまでのピンク映画は、ほとんどを輸入に頼っていたが、『肉体の市場』以降、ピンク映画という呼称が生まれ、日本製のものが作られるようになっていった。鈴木義昭『昭和の性文化⑦ ピンク映画水滸伝 その誕生と興亡』、人間社文庫、2022年、30-38頁。

- 6) 独立プロ：監督がプロデューサー（プロダクション社長）を兼任する場合が多い小規模な独立映画製作プロダクション。
- 7) 『団地妻 昼下りの情事』（1971）：西村昭五郎監督、白川和子主演。日活ロマンポルノ第一作。主演の白川和子は、元々ピンク映画の出身で、200本を超える出演実績があった。業績不振の苦肉の打開策としてロマンポルノ路線に振り切った日活の中には、ポルノ映画の撮影経験がない者が大半であり、彼女をはじめとするピンク映画出身の女優の存在は、ロマンポルノを展開するうえでの道しるべとなったことは間違いない。北川れい子「団地妻 昼下りの情事」、『官能のプログラム・ピクチュア：ロマン・ポルノ1971-1982全映画（本の映画館/ブック・シネマテーク；6）』（山根貞男責任編集）、フィルムアート社、1983年、20-21頁。
- 8) ナウポルノ：東映によるポルノ路線のこと。東映ニューポルノとも呼ばれる。その始まりは、東映が1971年から開始した「東映秘ポルノ大会」にある。東映二代目社長・岡田茂は、上映作品不足に悩んでいた映画館に日活ロマンポルノが流れるのを阻止するため、独立プロからピンク映画を買い取り、秘ポルノ大会と銘打って配給した。秘ポルノ大会が1973年に改称されたのが、「秘ナウポルノ」である。その後、ナウポルノは東映のポルノ路線全体を指すようになっていった。二階堂卓也『ピンク映画史』、彩流社、2014年、263-274頁。
- 9) 東活：1973年にできた松竹の子会社で、ピンク映画製作・配給会社。その中心にいたのは、小林悟である。小林は東活のメイン監督として活躍し、変名を使いながら東活で配給された約200本の映画を担当した。二階堂卓也『ピンク映画史』、彩流社、2014年、250-256頁。
- 10) ブルーフィルム：1920年代から1980年代初頭にかけて制作され、温泉旅館などの場所で密かに上映されていた無修正のポルノ映画を指す。1950年代末までは、主に16mmフィルム（1923年に初めて導入された）で撮影されていた。1965年、コダックがスーパー8を、富士フイルムがシングル8を開発したことで、撮影や流通が容易になった。さらに、多くの16mmフィルムが8mmフィルムに転写され、販売されるようになった。日本のわいせつ法により、これらの映画の流通および上映はすべて違法であった。吉川孝『ブルーフィルムの哲学——「見てはいけない映画」を見る』（NHKブックス1282）、NHK出版、2023年11月25日、30、51頁。

- 11) 端的に言えば、ブロックブッキング制のこと。当時配給会社の大手五社は、専属の映画館を持ち、基本的に自社以外の映画を上映しないようにしていた。そうすることで、五社は安定した興行収入を得ることができた。
- 12) 渡辺護(1931-2013)：ピンク映画史において最も重要な人物の一人。1960年代初頭にテレビ制作に携わった後、1965年にピンク映画界へ転身した。この頃、谷ナオミを『暴欲の色布団』（1967年）で初主演に起用して注目を集めた。ピンク映画というジャンルの中で複雑なストーリーを展開することのほかに、美保純や可愛かずみなど新人女優の発掘や、小水一男（ガイラ）や高橋伴明といった有望な監督たちの初期のキャリアを支援する手腕でも知られていた。
- 13) 井川耕一郎(1962-2021)：映画監督、脚本家。代表作に、渡辺護の弟子筋であり、渡辺監督作品の脚本を担当するほか、『渡辺護自伝的ドキュメンタリー』を制作している。『色道四十八手 たからぶね』は、病床の渡辺が「井川に撮って欲しい」と伝えたことから、井川の手になり、彼の初の商業映画となった。「introduction」、『色道四十八手 たからぶね』公式サイト、<https://pg-pinkfilm.com/takarabune-movie/intro.html>（2026年5月20日最終閲覧）。
- 14) ニッポン・コネクション：ドイツ・フランクフルトで毎年開催されている日本映画祭。現在、「ニッポン・シネマ」、「ニッポン・アニメーション」「ニッポン・ヴィジョンズ」、「ニッポン・レトロ」、「ニッポン・カルチャー」、「ニッポン・ドキュメンタリー」、「ニッポン・キッズ」の七部門に分けられ、新旧問わず優れた日本の映像作品、作り手の発掘を目指している。『色道四十八手 たからぶね』は、第15回ニッポン・コネクションニッポン・ヴィジョンズ審査員特別賞を受賞した。「映画祭について」、Nippon Connection公式サイト、<https://nipponconnection.com/ja/festival/about/>（2026年5月20日最終閲覧）。
- 15) 荒木太郎(1961-)：大蔵映画を代表するピンク映画監督。『せつなく求めて - OL編 - 』（2000）や『義姉さんの濡れた太もも』（2001）など、PG主催のピンク映画大賞の各賞やトップテン入選の常連。しかし、2018年に上映予定だった『ハレンチ君主 いんびな休日』は、大蔵映画の一存で説明なしに上映中止が決定。さらに、『週刊新潮』は荒木に無許可で脚本を誌面に掲載、『ハレンチ君主 いんびな休日』をめぐる騒動についての虚偽の内容を記事にする。この件に関し、荒木は、大蔵映画と新潮社に損害賠償を求め起訴した。結果は新潮社に対してはその訴えが認められたも

のの、大蔵映画への主張は退けられた。『荒木太郎監督 大蔵映画と「週刊新潮」
—糾弾裁判—〈増補改訂版〉』、太田耕耘キ 「ぴんくりんく」編集部、2024年。